

# 塩原温泉の旅 2019



2019年9月

旅のチカラ研究所 植木圭二

栃木県の塩原温泉の大手ホテルグループの宿に2泊3日で妻と行ってきた。私が知るかつての塩原温泉は大型ホテルが立ち並ぶ温泉街だったが、現在は昔の隆盛を感じられない。その現在をもっと知りたく大型温泉ホテルに泊まった。新たな発見もあり非日常を楽しむことができた。

## ■一枚の葉書から始まった

ひと月程前に私の手元に一枚の葉書が届いた。それは大手ホテルグループの宿「大江戸温泉物語ホテルニュー塩原」からのもので、格安の宿泊プランが印刷されていた。1泊2食7980円で、東京⇄塩原の往復直行バスに1500円で乗れるという大江戸温泉物語の宿としては比較的安いプランになっていた。

私は即決で申し込み、時期は最も宿が空いていそうな9月の上旬を選び、もちろん直行バスを使うことにした。バスを選んだ理由は、旅の目的が塩原温泉とホテルニュー塩原を満喫することにしたからだ。私は過去に塩原温泉を訪れており昔の隆盛を知っているだけに、現在そして今後はどうなるのだろうかと心配やら興味を持っていたからだ。

そして今、私たちは塩原温泉を目指すバスに揺られている。バスは乗車定員の半分くらいと、案の定かなり空いている。

ぐずついた空模様には真夏の日差しはなく、かといって秋の清々しさもないというこの時期特有の空気に包まれて、塩原温泉に到着する。

## ■想像以上に宿は大きい

宿には12時過ぎに到着したが、客室は掃除中とのことで入室できず早速館内散策を始める。

宿はとにかく大きい。昔からホテルニュー塩原という宿が大きいことは知っていたが、想像以上の大きさで、恐らくはこの塩原温泉の中で一番大きいだろう。

それゆえにこの宿は何でもそろっている。カラオケボックス、ゲームセンター、卓球場などは当たり前で本格的なボーリング場まである。研修・会議室もあるので研究発表会、趣味のサークル、学生団体、企業研修にも使える。

驚いたことに売店の隣のスペースにはコンビニが併設されている。これは便利で良いという思いと、いよいよコンビニまで入れてしまうかという気持ちも交錯してちょっと複雑だ。

フロントのある西館の隣には BH 館という建物があり、連絡通路で繋がっている。この建物はかつてホテル Beauty & Health という別の宿だった。

塩原温泉は箒（ほうき）川の渓谷の両側に温泉宿が集まって温泉街を作っている。箒川はそれなりの川幅があり高さもある。その川床から 50m くらいの高さに長さ 50m くらいの橋が架かっている。橋は西館と川の対岸にある「湯仙峡」という建物を結ぶためのもので、屋根と壁に覆われた長い廊下になっているので外気に触れることなく対岸の湯仙峡に行ける。この湯仙峡も昔は別の独立した大きなホテルだった。

つまり元々大きかったホテルニュー塩原は隣と対岸の 2 つのホテルを買収してさらに大きくなって現在に至っている。

#### ■風呂が素晴らしい

その湯仙峡の風呂が素晴らしい。7 階建て鉄筋コンクリートビルの一番下の階を使って岩と木を上手に使い、良い雰囲気を出している。温度や深さを工夫した 6 つの湯船があり、私の好きなサウナも併設されている。最大の売りは川べりに位置している半露天風呂で、目隠しの板があるものの解放感はたっぷりだ。

入浴すると、目の前には対岸の岩から滝が落ちている。対岸には先程まで私たちがいた西館があり、その西館の土台あたりから結構な水量の滝が落ちている。その滝は日本三大瀑布のひとつで有名な袋田の滝を小さくしたような形をしている。

川のせせらぎの音を聞きながら目の前の滝を眺めて、川面の新鮮な空気を吸い込みながら温泉に浸かるというのは本当に気持ち良い。至福のひとつとはこのことを言うのだろう。

半露天風呂に浸かりながら隣に居合わせた中年男性客と話始める。彼の話では数年前の豪雨で水位が急上昇してこの風呂にも濁流が流れ込み、復旧のためにしばらく閉鎖されていたという。

身を乗り出して川面を見ると、川面まではざっと 20m くらいはある。今のこの穏やかな流れからはとても想像ができない。

(写真は宿の公式 HP より)



## ■興味深い食事風景

3つのホテルが合体した現在のホテルは相当の人数が宿泊できる。ちなみに昨日は土曜日だったので約1000人泊まったという。

1000人が食べるレストランも相当に広い、そしてもちろん混雑している。

レストランには次から次へとお客が押し寄せてくるので、そのお客をテキパキと案内している従業員の動きがなかなか小気味よい。

食事は食べ放題のバイキングになっており、サラダ、刺身、煮物、揚げ物といった一般的な料理だけでもたくさんあるが、それら以外にも地元の名物料理やズワイガニ、そして料理人がその場で調理してくれるステーキ、天ぷら、ローストビーフと豊富だ。



ある貼り紙が目にとまる。そこには離乳食も用意してあるので必要な方は声を掛けてくれと書いてある。確かにお客の中には小さな子供、赤ちゃん連れの家族が多いような気がする。明らかに同様なホテルグループの宿に比べて客層が若い。

近くの席で食べている小さい子を連れている母親に声を掛けて月齢を聞くと、4カ月という答えが返ってきた。まだ4カ月では離乳食には早い、いずれありがたいサービスになるだろう。

このレストランで働く従業員たちの年齢も比較的若い。私はホテルや旅館を評価する一つとして、若者が責任ある仕事を任せられ一生懸命働いているかという点に注目している。

ここではどうだろうか。

お客が一挙に押しよせてくるので必然的に忙しく一生懸命動かないと仕事をこなせない。ホテルがあまりに巨大でそれが責任ある仕事なのか、あるいは創意工夫しているのかよく分からない。

そんな中でテーブルに立て掛けてあったメニューが床に落ちたのを見て、通りかかった和服姿の若い女性従業員がそのメニューを拾い上げ、さりげなく布巾で拭いて元に戻す姿があった。もちろんメニューは汚れている訳ではない。その光景に私は少し嬉しくなった。

学生のゼミなどの研修施設があるので若者たちのグループも多く来る。この光景も同様なホテルグループではあまり見かけない。

最近よく見かけるタイプのお客がいるので、私の勝手な想像も入れてレポートする。

まずは、太った女性が一人で来ているタイプで、長い間独身生活を謳歌しているのだろう食事を優雅に楽しんでいる。とにかく太っているのでたくさん食べる。食べ放題を完全なまでに使いこなして、人目も気にせず次から次へと料理を持ってきてはマイペースで食べ続ける。これでは太るはずだが、ここは温泉旅館で自分にご褒美とでも言い聞かせているのだろう。

そうかと思うとやはり良く見かけるタイプで、娘と老夫婦の3人で来ているお客だ。恐らくは40代の娘に70代の老夫婦という組み合わせだ。想像するに家族会議で温泉旅行が決まり、同居している独身の娘が手配して親が金をだすというパターンだろう。親孝行と言いながら娘は自分の欲求も満たせる一見平和家族とでもいうものだろう。しかしながら同じような組み合わせでも息子と老夫婦というのはあまり見たことがない。

### ■大衆演劇に大喝采

この宿には鳳凰座という劇場があり、フロントで聞いた話では今年から大衆演劇を始めたという。本日の出演は浪花劇団という、その名のとおり大阪の大衆演劇一座である。

実は私は今年の春、琵琶湖湖畔の雄琴温泉の日帰り入浴施設で同じような大衆演劇を見たことがあるが関東では初めてお目にかかる。

300くらいの椅子席が用意されており、本日はその半分くらいが観客で埋まっている。

演劇の内容はというと、基本のストーリーは人情話の時代劇でありながら、大阪のノリで笑いをふんだんに交えて所どころで脱線しながらも、見せ場もあり拍手もありで進行していく。関西弁の掛け合いとそのテンポの良さは北関東周辺ではあまり馴染みがないので最初はお客も身構えていたが、徐々に理解して解け込んでいく様子が後ろで見ている私には面白く感じる。会場が徐々に一体感を見せ始めてくる。



劇団一座は座長を中心にベテランと若手がチームワークよく舞台を盛り上げている。

座長の家族も出演しており、まだあどけない若者が脇役で登場した。声変わり前なので最初は娘かと思ったが、座長の長男だという彼はまだ14才の中学生である。1ヵ月公演なのでこの塩原の中学校に1ヵ月間だけ通うということを本人が明るく説明してくれる。

もう一人は来月3才の誕生日を迎えるという男の子も登場する。こんな幼い子がその他大勢の脇役ながら刀を持って舞台の袖から出てきて立派(?)に演技(?)をこなしている。観客からはこの子を見ただけで拍手が起こる。そしてその年齢を聞いてもさらに拍手が起こる。

子は親の背中を見て育つというのをそのまま感じて、何だか心温まる。

他にも大学を出たばかりの女優、離婚調整中のアラサー俳優など、ここまで言うかと思うほどにメンバーのプライバシーを暴露する。だからなのかとてもフレンドリーな雰囲気になっている。

フレンドリーでありながらも涙を誘う人情味あふれる話に、私も妻も目頭を押さえることが結構多くなる。周りを見渡してもそんな人ばかりである。

笑いと涙の時代劇、それはもう最後は盛大な拍手を送るしかない。

演劇以外にも歌謡ショーもやっているが、こちらの方は興ざめだ。カラオケでもなく歌っているような恰好をしているだけで、むしろやらない方がいいかもしれない。

## ■街を散策する

塩原温泉と塩原温泉郷を一緒くたにしている人もいるかもしれないが、塩原温泉郷は塩原温泉も含めて11地区の温泉地の集合体で相当に広い。いろいろな源泉があり全てを合わせると150本以上になる。日本の温泉は10種類の泉質に区分されているが、塩原温泉郷には6種類もあり、まさに温泉博物館のようだ。私のイメージでは塩原温泉郷は源泉豊富な山一帯で、塩原温泉はそれらの中心的な温泉街になる。

その温泉街を歩く。塩原温泉郷旅館協同組合の事務所を見つける。

事務所付近は温泉街のほぼ中心なのに観光客にも地元の人にもあまり出会わない。夏の終わりの寂しさも手伝って、秋風が吹き抜けていくような感じがする。

近くに「湯っ歩の里」という塩原市が最近作った大きな足湯施設がある。楕円形の人工池を囲んで足湯の回廊がカーブを描いて総延長60mも続いている。足湯に座るとガラス窓越しに池を見ることができ、もちろん屋根もある。恐らく規模とデザインにおいて日本で唯一無二だろう。

それなのに来場者は私たち含め数人しかいない。

この施設には足湯以外にも15分毎に噴出する間欠泉があるが、人工の間欠泉で高さは数メートルしか上がらない。世の中には自然の間欠泉で遥かに大規模なものもあり、本物志向が強まるこの時代においていかにも寂しい。

足湯も間欠泉も近年わざわざ作ったもので、それなりの費用をつぎ込んだはずなのにどうも歯車がうまくかみ合っていないような気がする。

受付をしている年配のおじさんとおばさんが暇そうにしているのが印象的だった。



散策途中で「伊東園ホテル」、そして「ホテルおおりり」を見つける。この2つのホテルも各々大手ホテルグループの宿で、大江戸温泉物語と同じようなビジネスを展開している。

それは経営不振のホテルを買い取り、独自の手法で再生させてお客に安く提供するもので、もちろん利益を上げている。ホテルニュー塩原も何年か前に大江戸温泉物語の宿になった。

この3つのグループの宿が塩原温泉にそろっているということは、それほどまでに塩原温泉におけるホテルや旅館の経営が厳しくなってきた証なのだろう。しかしそれはまた、やり方次第でお客が呼べて経営も良くなることを裏付けている。

#### ■温泉地の興亡

温泉地の興亡とは大袈裟な表現だが、温泉地がさびれる原因の一つは大型ホテル側にもある。

団体慰安旅行全盛の時代に大型ホテルが建った多くの温泉地では、ホテル内に飲食店や売店、エステサロン、アミューズメントなど全てがある。宿泊客はホテルから出ることなくホテルに留まり、やがて温泉街には人通りがなくなる。その結果、温泉地全体に活気や魅力がなくなり、最終的には大型ホテルにもお客が来なくなる。これが最近見かけるさびれた温泉地の姿である。

しかし、その中でも復活した温泉地や、さびれなかった温泉地もある。

ひと頃の熱海温泉は相当にさびれていた。しかし熱海市役所の担当者の身を粉にする奮闘努力によって最近復活してきた。その努力とは、テレビ局や雑誌社の取材要望に24時間対応し、取材先の紹介や撮影立ち合いにもきめ細やかに対応することで熱海温泉を宣伝していったという。

最近の別府温泉も元気が出てきた。大分県がインターネットで公開したPR動画「シンフロ」が火付け役で、温泉でシンクロナイズドスイミング（現在はアーティスティックスイミング）を演ずるという奇抜な動画が受けて230万回以上も再生されている。別府市が制作した10本の別府温泉の紹介動画も素晴らしく、非常に分かり易い。行政がインターネットを上手く活用した結果である。

私が日本一の温泉地と思ってやまない草津温泉の場合は、街のシンボルの湯畑にお客や住民が集まるので湯畑を中心に街が繁栄している。実はその湯畑は草津町が芸術家の岡本太郎にお願いしてデザインしてもらったものだ。湯畑の脇には岡本太郎の碑が建っている。

#### ■温泉地の興亡その2

つぶれそうな小さな温泉地が旅館の団結や地域の協力で日本屈指の温泉地になった例もある。九州の湯布院温泉と黒川温泉がその典型的な温泉である。

大分県の湯布院温泉は、かつては旅館 20 軒程の小さな温泉地だった。しかし旅館同士が少ないお客を取り合うのではなく、むしろ結束する道を選び、料理のレシピを共有するなど長い年月をかけて話し合いを重ねて信頼関係を作っていた。

他の温泉地が大型化・商業化していく中、湯布院としてどんな温泉地を目指すかと真剣に話し合い、その結果元々の田園風景を残して独自の景観や雰囲気を持つ保養地としての温泉を目指すことを決めた。

とはいうものの具体的にどのようにしたら保養地としての温泉は実現できるのか。

暗中模索した末に、ヨーロッパで滞在型の保養地として有名なドイツのバーデンに視察に行くことを決意した。しかし 1 ドル 360 円の時代に経営難の旅館組合には視察費用の捻出も大変で、それでも町長や住民の援助・協力で 50 日間のドイツ視察が実現した。

その結果、緑や静けさを伴う“ほっと”できる滞在型保養地になるには町全体でお客を迎えることが重要だと分かる。そこから湯布院の保養地としての町づくりが始まった。

熊本県の黒川温泉は無名な温泉地だったが 1970 年代 U ターンなどで旅館二代目が増えると、都会生活の経験を活かし温泉振興策を模索し始めた。そこでは湯布院温泉の復活秘話も参考になったに違いない。そして旅館組合を再編し 3 つの組織をつくった。

看板班がやったことは統一共同看板の設置だ。それまでは各旅館が目立つことを競って看板 200 本が乱立していたが、それらを全て撤去し統一看板を設置した。

環境班は景観重視の「情緒ある絵になる風景」を目指した。絵になる風景には露天風呂は欠かせないと、ある男が 3 年かけてノミ 1 本で洞窟露天風呂を掘った。それに影響され他の旅館でも彼の指導で露天風呂を作ったら、女性客が徐々に増えていった。それで当初は冷ややかだった旅館も次々と露天風呂を作るようになった。その結果、露天風呂からの借景が極めて美しい、風情ある黒川温泉が出来上がっていった。

企画班がしたことが素晴らしい。敷地の制約からどうしても露天風呂が作れない宿が 2 軒あり、その宿を救うための方策を考えた。それは黒川温泉の全て宿の露天風呂が利用できる入湯手形を発案した。温泉街でよく見かける入湯手形はここから始まった。

私はこの話を聞いた時に涙したことを覚えている。

## ■塩原温泉は何処へ向かうのか

生物の進化論では環境の変化にいかに対応したかで生物は生き残ることができ、その変化への対応が“進化”と呼ばれる。それは生物に限らずに企業や温泉地でも同様に、生き残るためには進化が必要なのである。

温泉地の環境、つまり温泉にやって来るお客の指向は団体慰安旅行の時代から明らかに変化している。それは本物の源泉志向、グルメ、インスタ映え、体験型の旅などで、一言でいえば多様化している。

その多様化に対応するように大型ホテルも進化をしている。それを今回の旅で垣間見ることができた気がする。しかし、ますますお客はホテルから出なくなるような気がする。

生物の場合は生き残るには後追いでも環境に対応していけばよいが、企業の場合は後追いをしているのは業界で存在感を示して成功できない。環境の変化を予測するとか、自ら環境を創り出すということをやって初めて業界を圧巻できる。

温泉地も同様で、日本を代表する温泉地として存在感を示すためには何かが必要だろう。

塩原温泉はいったい何処へ向かおうとしているのか。そんな心配をしながら私たちは帰りのバスに乗った。

#### ■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合いながらも最終的に温泉や宿を評価して5段階で数値化する。

ホテルニュー塩原の評価結果は、泉質3、風呂5、料理3.5、コスパ4、秘湯度3、サービス4、建物・部屋3.5で総合点は3.71になった。

泉質は塩化物泉、PH7.3、湧出温度66℃という源泉である。

#### ■旅の記録

実施は2019年9月1日（日）～3日（火）、2泊3日の旅の行程を以下に示す。昼食については朝食夕食共に食べ放題なので総量規制と、夕食の開始時間が17時と早いので全ての昼食は抜きにした。

- |     |     |                           |
|-----|-----|---------------------------|
| 1日目 | 8時  | 池袋駅西口集合し、バス直行便で塩原温泉へ      |
|     | 12時 | ホテルニュー塩原着 以降は館内散策、観劇、入浴など |
|     | 17時 | 夕食+アルコール飲み放題追加            |
| 2日目 |     | 朝食、その後は入浴、温泉街散策、観劇など      |
|     | 17時 | 夕食+アルコール飲み放題追加            |
| 3日目 |     | 朝食、その後は湯っ歩の里              |
|     | 14時 | ホテルニュー塩原発 バス直行便で池袋へ       |
|     | 17時 | 池袋西口着                     |

総費用は2人で約4万円。交通費も含めてホテルニュー塩原に支払った費用がほとんどになる。以下2人分の詳細費用を記す。

ホテルニュー塩原への支払い合計41876円、その内訳

・宿泊費用（1泊2食付7980円×2日×2人）+消費税	34473円
・往復直行バス（1500円×2人）+消費税	3240円
・飲み放題（1650円×2人）+消費税	3563円
・入湯税（150円×2日×2人）	600円
湯っ歩の里 入場料（200円×2人）	400円